

# スピノザの Philosophy of Mind を再考する（上）

松 田 克 進

（受付 1998 年 5 月 20 日）

## 序

§0 人間精神についてのスピノザの見解は、しばしば、「人間精神は人間身体の観念である」と定式化される。この有名なテーゼによって、スピノザはいったい、「人間精神」についてどのような説を打ち出しているのだろうか。本小論では、このことを、スピノザの議論の真意にできるだけ密着しながら論じてみたいと思う。

§1 一般に現代の Philosophy of Mind では、人間精神ということ考えられているのは、おもに、個人的（主観的）な感覚、意図、信念などのある種の集まりであろう。つまり具体的に言えば、仮にいま私が「空腹だ、学食に何か食べにいこう」と思うとすれば、このとき、空腹だという感覚、食事をしようという意図、学食に行けば食事ができるという信念が、まさしく私の精神の部分を構成していると考えるのが、現代では普通であろう。

しかし私は、人間精神の規定についてのこのようなスタンスは、スピノザを解釈するにあたっては非常に危険だと思う。確かにスピノザも、自らの哲学の内に、このような個人的な感覚、意図、信念をある仕方位置づけてはいるが、少なくとも彼が自らの Philosophy of Mind の基層を構築するとき、人間精神ということ彼が考えているのはそのようなものではない。スピノザ理解を試みるさいには、現代の Philosophy of Mind で一般に行われているスタンスに対し、我々は意図的に警戒すべきだと思われるのである。

§2 以下(～§4)において、このような警告に対する二、三の理由を確認しておきたいと思う。

本論の冒頭で私は、スピノザの立場の定式として「人間精神は身体の観念である」と書いた。しかし実はこの言葉はそのままの形ではスピノザのテキストに現れない。彼の主著『エチカ』でこの定式は、実際には次のような字面で登場する。

「人間精神は人間身体の観念あるは認識にほかならない(Mens humana est ipsa idea, sive cognitio Corporis humani)」(E2P19D)<sup>1)</sup>

ここでスピノザが「観念(idea)」という語を「認識(cognitio)」という語で置き換えていることに注意せねばならない。つまり彼は、人間精神は人間身体の認識である、と言っているのである。もちろん認識という語それ自体が非常に曖昧な語なのではあるが、少なくとも我々は次のようには言えよう。つまり、このような語の置き換えに注目するかぎり我々は、スピノザのいう「人間精神」が、意識現象の情的側面よりもむしろ知的側面を本義としている、と思わざるをえない、と。

§3 スピノザにとっての「観念」があくまでも知的な心的作用を意味する、ということは『エチカ』第二部の公理三によっても強く示唆されている。

---

1) スピノザのテキストとしては、C. Gebhardt (ed.), *Spinoza Opera* (Heidelberg, 1925), 4 vols. を用いる。

またスピノザのテキストを引用するにさいしては、次の略号を用いる。

E = 『エチカ』(Eのあとに部の番号を、さらにPの後に定理の番号を記す。Defは定義、Aは公理、Demは証明、Sは備考、Cは系を示す。例えば、E2P19Dは『エチカ』第二部定理19証明を指す。)

KV = 『短論文』(KVの後にゲーブハルト版全集第一巻の頁数を記す)。

TDIE = 『知性改善論』(TDIEの後にブルーダー版における節番号を記す)。

なお、スピノザのテキストの和訳については、岩波文庫に収められている畠中尚志氏の訳業を参考にさせていただいたことを、お断りしておく。

「愛、欲望のような思惟様態、その他すべて感情（*affectus animi*）の名で呼ばれるものは、同じ個体の中に、愛され、望まれなどするものの観念が存しなくては存在しない。これに反して観念は、他の思惟様態が存しなくても存在することができる」（E2A3）

この公理の文面からは次のことがうかがわれる。すなわち、スピノザが思惟様態を、観念と観念以外のものとの二つのグループに分けており、愛や欲望など（そして *affectus animi* という語からすると、おそらく色や音などの感覚印象も）は、観念以外の思惟様態に分類されている、ということである。またこれと同主旨の見解は、スピノザの他の著作にもしばしば登場し、例えば『短論文』では愛、欲望などの思惟様態を「観念の随伴物」と称してさえいる<sup>2)</sup>。

§4 そして、スピノザの「観念」概念の特殊性を決定的に印象づけるものとして、我々は、『エチカ』に現れる、「人間精神は神の無限知性の一部である」（E2P11C）という言葉あげることができる。神の無限知性という語の意味については後に考察するが、ここでは差し当たり、世界の一切の事物、事象についての客観的認識のことを意味すると考えておけばよい。そうすると、ここでスピノザが言っているのは、人間精神は世界全体についての客観的認識の一部である、ということである。むろん、一見するとこれはきわめて謎めいたテーゼである。実際のところスピノザ自身も、このテーゼについて次のように断っている。

「ここで読者は疑いもなく躓くであろう。そして躊躇を促す多くのことが心に浮かぶであろう。この理由から私は、読者がゆっくりと私とともに歩を進めて、すべてを通読するまではこのことについて判断を下さないようお願いする」（E2P11CS）

---

2) Cf. KV, 120.

つまりスピノザ自身も、自らのテーゼの難解さを率直に認めているわけである。しかしながら「人間精神は神の無限知性の一部である」という彼の言葉は、少なくとも次のような用心を理由づけるには充分であろう。つまり我々がスピノザの Philosophy of Mind にアプローチしようとするさい、そこでの「観念」という語は、現代哲学におけるのとは全く違ったものを意味しているのではないか、という用心である。

§5 確かに、しばしば行われているように、スピノザの Philosophy of Mind の内に、現代の心身二重側面説や非還元的唯物論（例えば非法則的一元論）の遙かなる先駆を見いだす、ということは非常に大きな知的興奮をもたらしてくれよう<sup>3)</sup>。私はそのような作業それ自体を無意味だと言うつもりはないし、また、そのような作業によって、案外、スピノザ解釈上の難所を克服する途が開けるかもしれない、という可能性を否定するつもりもない。しかしながら、スピノザの Philosophy of Mind をできるだけ整合的に解釈しようとするならば、やはり彼の形而上学に見られる語法や論理の独自性に十分な注意をはらうべきなのは言うまでもないのである。

繰り返しになるが、スピノザが「観念」というとき、そこに込められている意味は、現代的な立場が予想させるものとは大いに異なる。それは個人的な感情、意図、信念とは異なるものであり、むしろ事物、事象についてのある種の認識を本義としていると思われるのである。

では、以上に述べた注意を前置きとして、「人間精神は人間身体の観念である」というスピノザのテーゼの意味を見きわめる作業に着手することに

---

3) 例えば近年刊行された『オックスフォード哲学必携』において、執筆者の一人 D・デイヴィッドソンは、自説の非法則的一元論を簡潔に解説するにあたり、類似した立場としてスピノザ説に言及している。Cf. D. Davidson, "Anomalous Monism", in T. Honderich (ed.), *Oxford Companion to Philosophy* (Oxford University Press, 1996), p. 36. また S・プリーストはその著『精神の諸理論』の中で、心身二重側面説を採った代表的な三人の哲学者を挙げるさい、スピノザをラッセルおよびストローソンと並べている。Cf. S. Priest, *Theories of the Mind* (Penguin, 1991), Ch. 6.

しよう。

## I 形而上学の再考

§6 スピノザ哲学全体を貫く一本の柱があるとすれば、それは周知のごとく、「神即自然」の形而上学である。したがって我々は、もしも彼の用いる「観念」概念の本義、さらには観念と物体との関係についての彼の理論を正確に理解したいのならば、彼の「神即自然」の形而上学において、観念および物体がどのように位置づけられているかを確認せねばならない。そこで本章では、スピノザ形而上学の中身のうち、このような意味で我々の探求に relevant な要素を確認してみることにしよう。ただし紙幅の関係上、かなり圧縮した形の議論にならざるをえないであろうが。

議論の順序としては、まず彼の形而上学の根幹をなす「神」概念を考察する（§7～10）。次に、スピノザ研究者を困惑させてきた「属性」概念をとりあげる（§11～16）。そして最後に「無限知性」の意味を考察することにする（§17～20）。

### <神の概念>

§7 スピノザが神を唯一の実体と見なしたということは哲学史の常識である。そして彼が、この唯一実体たる神を自然と等置したこともまた哲学史の常識であろう。しかしながら、この「神を自然と等置する」ということでもってスピノザが何を意味したのかを、ある程度明確に把握することはそれほど簡単ではない。自然のいったい何をスピノザが神と等置したのかは、スピノザ研究者が常に立ちもどって慎重に考えなおさなければならない重要な問題だと思われるのである<sup>4)</sup>。

---

4) スピノザの「神」概念については、その意味に関わる問題以外にも、別の重要問題がある。すなわち、そもそもスピノザはなぜ、「神」という語を使って、その伝統的意味とは全く異なるものを指したのか、という問題である。本論ではこれについては論じないが、これについてはY・ヨーヴェルが、マラノ特有の「二重

この点に関するもっとも通俗的な解釈は、スピノザは自然の全体を神と等置した、という見方であろう。これは例えば、1780年代ドイツのいわゆる汎神論論争において、メンデルスゾーンがとった解釈であると思われるので、私はこれを「メンデルスゾーン解釈」と呼びたい。この解釈によれば、自然（宇宙、世界）の中の一切切のものの総計が神と等置される。そして自然の中の何であれ、それは神の一部分と見なされることになる。

たしかにメンデルスゾーン解釈は一見非常に分かりやすい。スピノザ哲学に冠される「汎神論」という言葉のイメージとも合致しやすい。しかしこれは、スピノザ解釈としては明らかに間違っている。なぜならば、自然全体が神（絶対無限実体）であるとする、自然が諸部分に分割されうる以上、神も分割されうることになるが、これをスピノザは決して認めないからである。彼は「絶対に無限な実体〔つまり神〕は分割されない」(E1P13)と明言しているのである。

またメンデルスゾーン解釈は、別の致命的な問題点をはらんでいる。スピノザは全自然を一個の個物として捉え、これを「全自然の相」と呼び、間接無限様態として位置づけているのであるが、この間接無限様態とは字面の通り、あくまでも一種の様態なのである。言うまでもなく、スピノザにとっていかなる様態も実体ではありえない、つまり神ではありえない。したがって彼にとっては、明らかに、自然全体は神とは等置されえないのである。自然の中の一切のものを合算したとしても、それはあくまでも神によって産出される様態なのであり、神とは別物なのである。メンデルスゾーン解釈はスピノザ読解における初歩的な間違いである。

§8 メンデルスゾーン解釈の難点は、結局のところ、自然の中にあって具体的規定を有する個物の集積を神と等置する点にある。そこで、この解釈

➤ 言語 (dual language)」という着想をもとに、綿密な議論を展開している。Cf. Y. Yovel, *Spinoza and Other Heretics: the Adventures of Immanence* (Princeton University Press, 1989).

の難点を克服するためには、神を、自然における絶対的に無規定的なもの、つまり自然の存在そのものと等置すればよい、と考えられるかもしれない。すなわち神を、自然の全体ではなく自然の存在（言うならば、「大文字の存在（Being）」とでも表現できようか）と等置する、というアイデアである。しかし残念ながら、この解釈もスピノザの読み方としては認められない。

たしかにこの解釈は、スピノザの言う神の非人格性という特徴と見事に合致するし、自己原因という特徴とも合致するのではないかと期待される。しかしながら、少なくとも二つの難点が指摘されうる。第一に、神は自然の中の一切のもの（様態）を産出するとされるが、存在そのものが様態を産出する、ということは理解しがたい、ということである。例えば「存在そのものが眼前のコップを産出した」というのはいったい何を意味するのか。眼前のコップを産出するというのは、眼前のコップを存在せしめるとのことであるから、この文は「存在そのものが眼前のコップを存在せしめた」という意味不明の文に書き換えられてしまうのである。

また第二に、スピノザは神が自らの内に必然的な法則性を内包している、と考えており、例えば「神は単に自己の本性の諸法則のみによって働き、何ものにも強制されて働くことがない」（E1P17）と述べている。ところが、存在そのものが法則性をはらむ、ということはやはり意味不明なのである。我々が忘れてならないのは、スピノザの神概念は、ガリレオやデカルトによって確立された近代的科学観ないし機械論的自然観を強力な背景としている、ということである。スピノザの神概念は、決して存在そのものというような多少とも曖昧で神秘的なものを指すのではなく、むしろ新科学が強調する自然の必然的法則性を内に取り込むようなものなのである。

§9 以上の考察から、スピノザの神概念をどう解釈するかについて、明確な方向性が見えてこよう。つまりスピノザの言う神とは、①自然内の個物の集積ではなく、②不可分であり、③いっさいの個物を産出する因果性を有し、④近代的科学観が強調する法則性を内包するものでなければならな

い。では、このような諸条件を満足するような解釈があるだろうか。ある、と思う。それは、H・E・アリスンが提示している解釈である。それによると、スピノザにとっての神とは、「普遍的法則の無限かつ必然的な体系」<sup>5)</sup>であり「〔自然の〕無限かつ必然的な秩序」<sup>6)</sup>であり、「事物の必然的かつ普遍的な秩序」<sup>7)</sup>である。要するに、アリスン解釈によると、スピノザの神とは、すべての自然法則から成るシステムを意味するのである。そしてそのようなシステムが先ほどの諸条件を満足することは明らかであろう。なぜなら、①自然法則のシステムは個物でもその集積でもなく、②論理的構造を有するこのシステムを分割することは不可能（あるいは無意味）であり、③自然法則とは基本的に因果法則であり、④法則が法則的であることは自明だからである。

さてこのように考えると、従来からスピノザ研究者を悩ませてきた、「実体と様態の関係」の問題にも一応の決着がつく。これまで研究者たちは、＜実体（つまり神）／様態＞関係を、＜主語／述語＞関係、あるいは＜原因／結果＞関係、＜根拠／帰結＞関係、＜全体／部分＞関係、＜基体／性質＞関係などに類比的なものと想定してきた<sup>8)</sup>。しかし我々の解釈によると、＜実体（神）／様態＞関係は、何よりもまず、システムとその所産との関係と見なされることになる。なるほど、このシステムを一種の論理的構造と捉えるならば、当該の関係は＜根拠／結論＞関係とも目されえようし、ま

5) Henry E. Allison, *Benedict de Spinoza: An Introduction* (Yale University Press, 1987), p. 35.

6) *Ibid.*

7) H. E. Allison, *op. cit.*, p. 49.

8) 解釈史のこの側面については、カーリーが簡潔に整理してくれている。Cf. E. Curley, *Spinoza's Metaphysics: Essay in Interpretation* (Harvard University Press, 1969), Ch. 1.

またカーリーは他の著作でも、＜実体／様態＞関係を＜基体／性質＞関係と見なす解釈を取りあげ、それに対しほぼ決定的な反駁を展開している。Cf. E. Curley, *Behind the Geometrical Method: A Reading of Spinoza's Ethics* (Princeton UP, 1988), pp. 33-36.



た、システムを一種の物理的構造と捉えるならば、それは＜原因／結果＞関係とも見なされえよう。しかしともかく、最も中性的な捉え方をするならば、＜実体／様態＞の関係は、＜システム／所産＞関係と見なすのが適しているのである。

§ 10 ただし、ここで十分に注意せねばならないことがある。スピノザが神を全自然法則のシステムと等置したというとき、ここでの自然法則とは、我々が漠然と予想するような物理的自然法則だけを意味するのではない、ということである。なぜならばこうである。我々が普通考える物理的な諸々の自然法則は、なるほど物理的事象の必然的生起を記述してはいるが、それら法則そのものは偶然的であると一般には考えられていよう。例えば、ニュートン力学の一連の法則は宇宙の必然的な特徴を記述してはいるが、それらの法則自体は偶然的であっても構わないし、また実際、偶然的なものと一般には捉えられているはずである。これに対して、スピノザの神概念が意味する「全自然法則のシステム」とは、それ自体が完全に必然的なものと目されている。このことをスピノザは「神は……必然的に存在する」(E1P11)と表現する。つまりこのシステムに属するいかなる自然法則も、どれ一つとして偶然的なものはない。したがって、「ものは現に産出されているのとは異なったいかなる他の仕方、いかなる他の秩序でも神から産出されることができなかった」(E1P33)ことになる。これはライプニッツに由来する用語を用いれば、現実世界が唯一の可能世界であるということにほかならない<sup>9)</sup>。

9) スピノザをこのような徹底した決定論者とは見なさない傾向が、おもに1980年代以降の英米の研究者に見られる。例えば、J. Bennett, *A Study of Spinoza's Ethics* (Hackett, 1984); R. J. Delahunty, *Spinoza* (Routledge and Kegan Paul, 1985); E. Curley, *Behind the Geometrical Method* などにその傾向が見られる。しかし私はこのような傾向に賛同できない。理由はこうである。第一に、『エチカ』第一部定理29は、現実世界以外の可能世界を否定するテーゼとしてしか解釈できないと思わ

<属性の概念>

§11 スピノザ形而上学の解釈史における最大の問題は、よく知られているように、「属性」概念を主観的（観念論的）に解釈するか客観的（實在論的）に解釈するかという問題であった。主観的解釈とは、属性を、知性が実体（神）を認識するさいの主観的な認識形式と捉える立場であり、他方、客観的解釈とは、属性を、実体（神）に内在する客観的な性質と捉える立場である。しかしこの論争は、すでに F. S. Haserot の論文によってほぼ完全に決着がついていると思われる<sup>10)</sup>。つまり現在では、客観的解釈が圧倒的な勝利をおさめていると言ってよい。むろん私もその解釈に与している。属性とは、知性が実体を捉えるとき実体に内在するどの側面ないしアスペクトから実体を捉えるか、ということを表す概念なのである。

しかしながら、属性については今でも、非常に困難な解釈上の問題がいくつか残っている。私はそのうち、スピノザの心身関係論に本質的に関わる一つの問題、しかも、まだごく一部の研究者にしか本格的に注目されていない問題について考察しておきたい。それは、「諸属性の非対称性」の問題である<sup>11)</sup>。

↘ れる。第二に、無限知性は一切のものについての必然的認識を持つ、という立場に対するスピノザのコミットメントは、絶対的決定論の主張を含むものとしか考えられない。かくして私は、スピノザの決定論の「含意」の強さに関しては、アリスンと同様に伝統的解釈の側に立つ。Cf. H. E. Allison, *op. cit.*, pp. 74-7.

10) Cf. F. S. Haserot, "Spinoza's Definition of Attribute", in *Philosophical Review*, Vol. LXII (1953). Reprinted in S. Paul Kashap (ed.), *Studies in Spinoza: Critical and Interpretive Essays* (University of California Press, 1972).

11) 少なくともカーリーはこの問題について本格的に考察している数少ない研究者の一人であり、私も彼の仕事には大いに刺激された。本論 §12, 13で私が示す図と同様の図も、すでに E. Curley, *Spinoza's Metaphysics*, p. 146 で提示されている。ただしこの問題に関する私の議論は基本的に『エチカ』第二部の論理展開に依拠するものであり、この点でカーリーのアプローチと異なっている。

§ 12 スピノザは次のように神を定義している。

「神とは、絶対に無限なる実有、いいかえれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体、と解する」(E1A6)

この定義の意味を素朴にイメージするとき、次のような図式が思い浮かぶことであろう。すなわち、神が唯一の実体として存在し、その神を知性が認識するさい、神の有する無限に多くの側面ないしアスペクトのどれからでも神を認識することができる。例えば思惟の側面からでも、延長の側面からでも、さらに別の属性  $x$  の側面からでも、 $y$  の側面からでも、というように。もっとも、人間が接近可能な属性は、スピノザも認めるように思惟と延長の二つだけなのだが、とにかく神については無限に多くの属性がある。思惟はそのうちの一つであり、延長もそのうちの一つである。——このようなイメージである。

このイメージを更に具体的に表現するために、これまで研究者たちはいくつかの比喩を試みてきた。例えば L・ブランシュヴィックは、異なる言語による同一命題の表現という比喩をあげている。つまり同一命題が、日本語によっても英語によってもフランス語によっても表現されるように、同一実体が延長属性においても思惟属性においても属性  $x$  においても属性  $y$  においても表現できる、というわけである<sup>12)</sup>。

また E・ブレイエはデカルトによる解析幾何の発案を持ち出して、同一の数学的対象が幾何学的曲線によっても代数方程式によっても表現されるように、同一実体も異なる属性によって表現される、と述べた<sup>13)</sup>。

さらにまたアリスンは、ブランシュヴィックやブレイエによるこれらの

12) Cf. Léon Brunschvicg, *Spinoza et ses contemporains* (Felix Alcan, 1925); cited by E. Curley, *op. cit.*, p. 144.

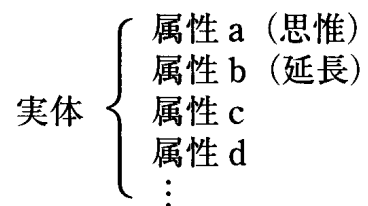
13) Cf. E. Bréhier, *Histoire de la philosophie*, Vol. 2 (Presses Universitaires de France, 1968), pp. 151-2.

比喩よりも、もっと単純な比喩を提示している。つまり彼によると、我々が同一の机を前面からでも背後からでも上方からでも、その他無限の視点から見ることができるように、同一実体も、無限に多くの異なる属性において捉えることができる、というのである<sup>14)</sup>。

これらのイメージないし比喩は、それぞれ属性概念の理解をある程度平易なものにしてくれるという点で意味がある、と私も考える。しかし、残念ながらそれらは皆、一つの根本的な問題をはらんでいると思われる。

§13 これらのイメージおよび比喩は、諸属性の対等性ないし対称性を前提としている。つまり簡単に図示すると、属性について次のような図式を前提としているのである。

<図式1>



このような単純なイメージは、スピノザの大抵の読者の先入見になっているであろう。また哲学史の入門書やスピノザについての概説書も、ほとんどの場合このイメージを強化している。しかし残念ながら、スピノザのテキストを子細に読むかぎり、このような属性の対称性は見事に崩れることになる。ではなぜ崩れるのかというと、結論を先に言えば、スピノザは思惟属性について、他のさまざまな属性の一つ一つに対応する別個の思惟属性を想定しているからである。つまりスピノザが考える実体と属性の関係は、この図式が示しているものよりもずっと複雑なのである。このことを説明してみよう。

---

14) Cf. H. E. Allison, *op. cit.*, p. 50.

§ 14 まず、スピノザ研究史上有名なエピソードから始めよう。それはチルンハウスとスピノザとの間のある問答である。「スピノザ全集」に収められている書簡63でチルンハウスは

「精神は神の諸属性のうち延長と思惟しか認識しえないというあなたの御主張を証明していただきたいと思う」<sup>15)</sup>

とスピノザに質した（共通の友人シュラーを通して間接的にであるが）。このとき彼が念頭においていたのは我々が先ほど示した＜図式1＞であることは同書簡の文面から明らかである。確かに、このような図式を念頭に置くかぎりには、我々の精神が延長（属性a）を認識しうるならば、それは延長と並列的に並ぶ他の諸属性をも認識しうると予想するのは自然であろう。ところがスピノザは人間精神に捉えられる属性は思惟と延長だけだと言う。これはなぜか、という疑問が頭をもたげるのも当然ではなかろうか。チルンハウスは、まさにこの「当然の問い」を発したのである。しかしこの問いに対するスピノザの返答（書簡65）は、次のような素気ないものであった。

「各物は神の無限知性の中では無数の仕方で表現されるが、しかし、この表現された無数の観念は、ある一個物の単一なる精神を構成することができず、無数の異なった精神を構成する。これら無数の観念の各々は、私が『エチカ』第二部定理7備考で説明したように、また第一部定理10から明かなように、相互に何らの連結を有しないからである。もしあなたがこれらのことに多少でも注意なさるなら、もはや何の難点も残らないことを認められるであろう」<sup>16)</sup>

紙幅の関係で、今この場でこの引用箇所を詳細に分析することは控える

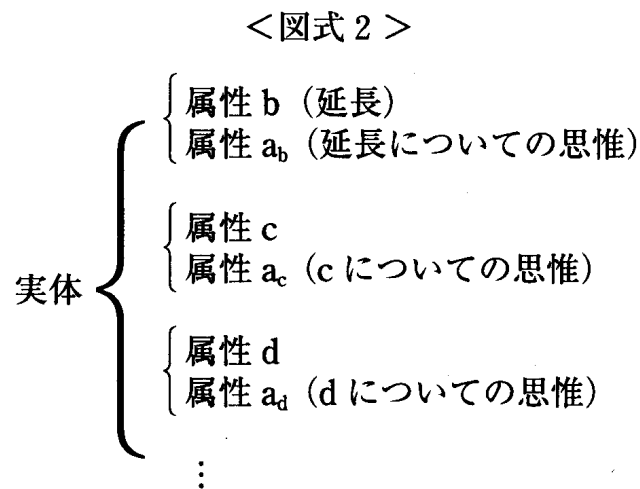
---

15) C. Gebhardt (ed.), *Spinoza Opera*, Vol. 4, pp. 274–5.

16) Ibid., pp. 277–8.

が、ここで特に注目したいのは、次のような見解をスピノザが明示しているということである。すなわち、同一のものが神の無限知性においては、無限に多くの仕方——これが「無限に多くの属性」を意味することはこの文脈では間違いない——で表現され、その無限に多くの属性における無限に多くの表現それぞれについて観念が存し、それら無限に多くの観念は、それぞれ別個の精神を構成する、という見解である。

この見解は明らかに、我々が先ほど提示した図式の改訂をはっきりと迫るものである。というのも、同一物の、異なる属性における表現ごとに、観念が存するということは、異なる属性（例えばcとd）ごとに思惟属性が対応している（cについての思惟とdについての思惟が存する）ことを前提としているからである。そこで先ほどの図式に代わる代替案として、次のような図式が考えられることになる。



§14 この新しい図式を支持する根拠は、書簡集よりもはるかに重要な『エチカ』そのものの内に実ははっきりと見いだすことができる。それは『エチカ』第二部定理13である。そこでスピノザは、

「人間精神を構成する観念の対象は物体である、あるいは現実中存在するある延長様態である、そしてそれ以外の何ものでもない」

という命題を証明しようとしている。しかしスピノザのそこでの議論は、思惟属性が他の諸属性  $b, c, d \dots$  に応じて、 $a_b, a_c, a_d \dots$  と差異化されている、と想定しなければ全く理解不能になると思われるのである。つまり、スピノザがこの定理で問題にしているのは、人間精神が  $a_b$  に属するのか、 $a_c$  に属するのか、 $a_d$  に属するのか……、ということである、と考えなければこの定理13は意味不明になるのである。

そしてスピノザは、第二部公理4「我々はある物体が多様な仕方で刺激されるのを感じる」を決定的論拠として、人間精神が  $a_b$  に属する観念であることを結論づけている。つまり、人間精神は物体（延長様態）を対象として知覚するのだから、当然、延長属性についての思惟に属するはずだ、と考えるのである。かくして定理13「人間精神を構成する観念の対象は物体である」が証明されるのである。

さらに付け加えるならば、思惟属性が他の属性ごとに差異化されることを認めないならば、『エチカ』第二部定理11と定理13の意味の相違がきわめて理解し難くなると思われる。ごく簡単に述べると、定理11では＜人間精神を構成する観念の対象は現実中存在する何らかのものの観念だ＞と言われる。しかしここでは、いまだ、そのものがいかなる属性に属するものなのか、いいかえれば、人間精神が  $a_b, a_c, a_d \dots$  のどれに属するのか、が結論されていない。まさしくこの点を明確化するのが定理13の働きなのである。

§15 <図式2>を採用することによって、スピノザについての解釈上の変更がいくつも余儀なくされると思われるが、そのような変更の中でも重大なものは、『エチカ』第二部定理7に関わるものであろう。スピノザの「属性」概念についての考察を終えるにあたって、この論点（これはスピノザの Philosophy of Mind を再検討するにあたって非常に重要になる）について言及しておきたい。

第二部定理7とは、

「観念の秩序および連結はものの秩序および連結と同一である (Ordo, et connexio idearum idem, est ac ordo, et connexio rerum)」(E2P7)

という命題である。これは『エチカ』第二部の中でもおそらく最も有名な定理であり、しばしば「心身平行論 (mind-body parallelism)」と呼ばれている。そしてこの呼称が示唆する通り、この命題は伝統的に、思惟属性と延長属性との間の平行関係を意味するものと解されてきた。すなわちこの定理は、思惟属性において展開される観念の秩序は、延長属性において展開される物体の秩序と同一である、という主張として理解されてきたのである。

しかしながら我々は、属性について〈図式2〉を採用する限り、この伝統的解釈を疑問視せざるをえない（そしてこのことは、定理7に対して与えられてきた「心身平行論」という呼称の適切性を疑問視することをも意味する）。すなわち、ここでスピノザが平行関係にあると主張しているのは、単に延長属性とそれに対応する思惟属性との平行関係に限定されるのではなく、一般に、任意の属性とそれに対応する思惟属性との平行関係ではないか、と予想されるのである。

§16 私の見るところ、この予想を傍証するテキスト上の材料は二つある。

第一は、定理7の字面にひそんでいる。すなわちスピノザはそこで「……物体 (corpora) の秩序……と同一である」と書かず、「……もの (res) の秩序……と同一である」と書いている。この「もの (res)」という中立的な書き方によってスピノザは、思惟属性に対応する属性についての限定を避けているように思われるのである。

定理7に対する我々の新しい解釈を傍証する第二の材料はこの定理7の系である。そこでスピノザは次のように述べている。

「この帰結として、神の思惟する能力は神の行動する現実的能力と等しいことになる。いいかえれば、神の無限な本性から形相的 (formaliter)



に起こるすべてのことは、神の観念から同一秩序・同一連結をもって神のうちに表現的（objective）に起こるのである」（E2P7C）

ここには「形相的」と「表現的」という十七世紀哲学にとって非常に重要な用語が現れている。これらの語の意味は当時の哲学者によって微妙に異なると思われるが、少なくとも『エチカ』や『知性改善論』などでのスピノザの用語法から見る限り、「形相的」という語は延長属性にだけ関わる狭い意味では決して用いられない。スピノザが「形相的」という語を用いるとき、彼はそれをもって一般に、観念によって表現（表象・記述）されるという対象の在り方を意味しているのである。だからこそ思惟属性である観念でさえ、別の観念の対象となるときは、その限りで「形相的」な在り方をしていることになる<sup>17)</sup>。他方、「表現的」という語は、何らかの対象を表現する限りでの観念の在り方を意味する。したがって、この定理7系に現れる「形相的」という中立的な語は、定理7においてスピノザが、思惟属性に対応する属性を延長属性に限定してはいないことを示しているのである。

かくして定理7に対する我々の新しい解釈が適切なものである蓋然性は高まる。我々の新解釈を再度定式化しておくと、それは、定理7でスピノザが主張しているのは、単に延長属性とそれに対応する思惟属性との平行関係に限られるのではなく、一般に、属性  $b, c, d, \dots$  とそれに対応する思惟属性  $a_b, a_c, a_d, \dots$  との平行関係である、というものである。この解釈によれば、定理7はもはや、「心身平行論」という限定的な呼称で呼ばれるべきではない。それは一般に、観念と（任意の属性における）その対象との平行論を意味する。心身平行論はあくまでも、定理7の一局面にすぎないのである<sup>18)</sup>。

---

17) Cf. TDIE, 33, 34.

18) 我々は単純な<図式1>を捨て、より複雑な<図式2>を採ったのであるが、実をいえば、スピノザが『エチカ』第二部定理20, 21で展開している「観念の観念」説を考慮に入れば、<図式2>は、更により複雑な図式に取って代わられねばならないかもしれない。しかし我々は紙幅の関係でこの点については論じない。

＜無限知性の概念＞

§17 以上に我々は、神の諸属性の中でも思惟属性が占める独特の地位について考察した。すなわち思惟属性は、単に一つのものなのではなく、他の諸属性 (b, c, d ……) の一つ一つに対応して差異化 ( $a_b, a_c, a_d \dots$ ) しているのである。ではなぜこのような事態が起こるのであろうか。思惟属性の差異化をもたらすものは何なのか。それは、端的に言えば、思惟が神の属性である、という一事にほかならない。いいかえれば、「思惟は神の属性である、あるいは神は思惟するものである」(E2P1) ということこそが、思惟属性の差異化をもたらすのである。このことを説明してみよう。

思惟が神の属性であるということは、神は、一切のものについて思惟する、つまり、ありとあらゆるものについて観念ないし認識をいなく、ということの意味する。この「ありとあらゆるもの」の中には、神から産出されるもの、つまり様態が入るのみならず、当然、神そのものも入るであろう。つまり「神のうちには必然的に、神の本質の……観念が存する」(E2P3) のである。そしてこのことは、無限に多くの属性が神の本質を構成する以上、つぎのことを意味せざるをえない。すなわち神は、それら無限に多くの属性について思惟する、つまり認識するということである。したがって、神のうちには属性 b についての思惟も、属性 c についての思惟も、属性 d についての思惟も、その他すべての属性についての思惟が、存するのである。まさにこのようにして思惟は、思惟属性  $a_b$ 、思惟属性  $a_c$ 、思惟属性  $a_d$  ……として差異化せざるをえないのである<sup>19)</sup>。

19) もちろん神のうちには、これら差異化した諸々の思惟属性についての思惟も存するはずである。かくして、思惟属性  $a_b$  についての思惟属性  $a_{ab}$ 、思惟属性  $a_c$  についての思惟属性  $a_{ac}$ 、思惟属性  $a_d$  についての思惟属性  $a_{ad}$  ……へと差異化し、このような仕方では無限に続くであろう。すぐ前の(注18)で私が示唆した「更により複雑な図式」とはこのことを指しているのである。しかしこの問題については本小論では触れない。

§ 18 思惟が神の属性である以上、神のうちには、神自身の本質を含めて万物についての知が存することになる。この包括的な知が、スピノザが「無限知性 (intellectus infinitus)」と呼ぶものである。(これは時には「神の観念 idea Dei」とも呼ばれ、§ 16で引用した定理7系に登場する「神の観念」も無限知性の意味で用いられている。)

しかし、この無限知性とは、より具体的にはどのようなものか。いいかえれば、無限知性のなかにある万物についての知とはどのような知なのであろうか。これはスピノザ哲学を理解するにうえで非常に重要な問題である。結論を先にいえば、無限知性における知とは、「論理的な一連の推論」にほかならない。このことを以下に説明する。

§ 19 まず『エチカ』第一部定理29に着目しよう。そこでは次のような、いわゆる「決定論 (determinism)」のテーゼが表明されている。

「自然のうちには一つとして偶然なものがなく、すべては一定の仕方  
で存在し作用するように神の本性の必然性から決定されている」  
(E1P29)

このテーゼで主張されているのは、自然のなかの一切のものは神、すなわち全自然法則のシステムから必然的に生起する所産である、ということである。一言でいえば「万物は結果である」ということである。したがって、任意の対象についての知とは、とりもなおさず、一個の結果についての知である、ということになる。では結果についての知とはいかなるものか。これについてスピノザは、第一部公理4（これはスピノザ哲学全体を通じて最も重要な命題の一つであると私は考えている）で次のように述べている。

「結果の認識は原因の認識に依存し、かつこれを含む (Effectus

cognitio a cognitione causae dependet, & eandem involvit)」(E1A4)

この公理が言わんとすることは、端的に言えば次のことである。

①任意の結果  $x$  について、それを認識するということは、その原因  $y$  を認識するということを含む。

他方、スピノザは第一部公理 3 で次のように述べている。

「与えられた一定の原因から必然的にある結果が生じる、これに反して何ら一定の原因が与えられなければ結果の生じることは不可能である (Ex data causa determinata necessario sequitur effectus, & contra, si nulla detur determinata causa, impossibile est, ut effectus sequatur)」(E1A3)

この公理が主張するのは、因果関係は偶然的関係ではなく必然的關係である、ということにほかならない。このことと先ほどの①とを考え合わせれば次のような命題が帰結しよう。

②任意の結果  $x$  について、それを認識するということは、 $x$  を必然的に生起せしめる原因  $y$  を認識するということを含む。

この②からは、無限知性についての次のような命題が帰結するであろう。なぜならば、無限知性は、任意のもの  $x$  の原因  $y$  についても更にその原因を認識するので、因果系列の認識を、その系列の最終項（すなわち自己原因としての神そのもの）に到達するまで遡及することができるはずだからである。

③無限知性は、任意のもの  $x$  について、 $x$  が必然的に生起する因果的プロセス全体を認識する。

そしてこの③が次のような命題へと換言されるのはごく自然であろう。

③無限知性のうちには、任意のもの  $x$  の生起について、 $x$  の生起を主張する命題  $p_x$  を帰結とする一連の推論  $\Phi_x$  が含まれる。

§20 かくして無限知性の具体相がある程度明らかになる。すなわち、無限知性とは、任意のもの（そこには神即自然そのものも含まれる） $x$  について、その存在を意味する命題  $p_x$  を帰結する一連の推論  $\Phi_x$  の無限列によって構成されているのである<sup>20)</sup>。

そしてスピノザが、「観念」という語を無限知性ないしは思惟属性との連関で用いるとき、彼がそれで意味しているのは、この推論  $\Phi_x$  にほかならない。これが彼にとっての「観念」の本義なのである。だからこそ彼は、「観念の中にはそれを虚偽と言わしめるような積極的なものは何もない」（E2P33）とすることができたのである。しかし、無論スピノザも「偽なる観念（idea falsa）」の存在を認めてはいるし、後に考察するように、誤謬の成立条件についての考察を展開している。そこで彼は、本義における

---

20) スピノザは『エチカ』の中で、何らかの個物  $x$  についての推論  $\Phi_x$  の具体的例を一つたりとも示していない。このことはおそらく、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』で要素命題の実例を一つも示していないのと類比的な事態なのだと思う。『論考』のウィトゲンシュタインにとっては、言語が可能である以上は、要素命題が「存在せねばならない」のであり、このことは要素命題の例をあげることができるということとは全く別個のことであつたと思われるが、これと類比的に、スピノザにとっても、思惟が神の属性である以上は、任意の個物  $x$  について、それに対応する推論  $\Phi_x$  が「存在しなければならない」のであって、このことは人間知性がそのような推論の具体例をあげることができるということとは全く別個の事柄なのである。

観念を偽なる観念から特に区別したいときには、「十全な観念 (idea adaequata)」という用語を用いる。すなわちこれは、対象の生起についての必然的推論  $\Phi_x$  のことである。それは、いかなる論理の飛躍をも含んでいないので、「真の観念のすべての特質ないし内的特徴を有する」(E2D4) 観念である、とされる。

さて話を戻すと、無限知性においては、自然のなかの一切のものについての(十全な)観念が存する。これはいいかえれば、この自然の中には、それが成立する必然的因果的プロセスが原理的に分からないようなもの——端的に言えば神秘——は何一つ存在しない、ということである。無論これは、有限な人間知性が一切を理解できる、というような荒唐無稽な説ではない。そうではなくて、一切は原理的には理解可能だ、という主張である。無限知性のレベルにおいては謎は皆無だ、ということである。これを我々は「可知性の原理 (principle of intelligibility)」と呼ぶことにしよう。

ここで注意したいのは、この「可知性の原理」は、ライプニッツの「充足理由律」とは異なる、ということである。なるほどライプニッツも、この充足理由律によって、任意の事物にその存在理由が存することを認めてはいるが、彼の場合、事物の存在理由とは必ずしも、そのものの必然的な生起を帰結させる論理的な推論ではない。そしてまさしく、存在理由が論理的推論ではないという点に、ライプニッツは事物の存在の偶然性を確保しようとするのである。これとは全く対照的に、スピノザにとって事物の存在理由とは、いかなる事物についてであれ、そのものの必然的な生起を帰結させる論理的な推論 (我々の表記法では  $\Phi_x$ ) なのである。したがって、スピノザの「可知性の原理」とはライプニッツの「充足理由律」よりもはるかに強力な意味内容を有していると言わねばならない<sup>21)</sup>。

21) 事物の可知性に関するスピノザの強い立場をアリスンは、「事物の究極的可知性 (ultimate intelligibility of things)」, あるいは「過激合理主義 (extreme rationalism)」と呼んでいる。的確な表現であると思う。Cf. H. E. Allison, *op. cit.*, p. 77.

§ 21 さて本章の目的は、スピノザ形而上学の中身のうち、彼の Philosophy of Mind の考察にとって relevant な要素を確認することであった。前節までで我々は、ほぼそのような確認を終えたと思う。ただし本章を終えるにあたって、属性の非対称性について § 13 で提示した〈図式 2〉をもとに、より詳細な——つまり様態も書き込まれている——図式を、示しておこうと思う。そうする方が、次章でスピノザの Philosophy of Mind について細かく議論するときにより便利だからである。

まず延長（属性 b）を取りあげよう。この属性には、無限に多くの延長様態すなわち物体  $x, y, z, \dots$  が属している。そして先に見たように、無限知性には、これらの様態各々に対応する推論  $\Phi_x, \Phi_y, \Phi_z, \dots$  が含まれていなければならない。無論、これらの推論は、延長についての思惟（属性  $a_b$ ）のうちに含まれているはずである。我々は、こういった一連の事柄を次のように表記することにしよう。

属性 b =  $\langle x, y, z, \dots \rangle$

属性  $a_b$  =  $\langle \Phi_x, \Phi_y, \Phi_z, \dots \rangle$

また、属性 c（これは人間精神には知覚されない属性である）に属する様態を、「 $(x), (y), (z), \dots$ 」と表記するとすれば、無限知性における、これらの様態に対応する推論は、「 $\Phi_{(x)}, \Phi_{(y)}, \Phi_{(z)}, \dots$ 」と表記できよう。さらにまた、属性 d に属する様態を「 $((x)), ((y)), ((z)), \dots$ 」と表記するなら、無限知性におけるそれら様態に対する推論は、「 $\Phi_{((x))}, \Phi_{((y))}, \Phi_{((z))}, \dots$ 」と表記できる。

かくして、〈図式 2〉は、次のような〈図式 3〉に書き換えられることになる。

<図式3>

$$\begin{array}{l} \text{実体} \left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{属性 } b = \langle x, y, z \cdots \rangle \\ \text{属性 } a_b = \langle \Phi_x, \Phi_y, \Phi_z \cdots \rangle \end{array} \right. \\ \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{属性 } c = \langle (x), (y), (z) \cdots \rangle \\ \text{属性 } a_c = \langle \Phi_{(x)}, \Phi_{(y)}, \Phi_{(z)} \cdots \rangle \end{array} \right. \\ \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{属性 } d = \langle ((x)), ((y)), ((z)) \cdots \rangle \\ \text{属性 } a_d = \langle \Phi_{((x))}, \Phi_{((y))}, \Phi_{((z))} \cdots \rangle \end{array} \right. \\ \\ \vdots \end{array} \right. \end{array}$$

<図式3>が、ある意味でスピノザの議論を単純化しすぎていることは私も認める。しかしともかく、諸属性の非対称性（つまり思惟属性の差異化）、および無限知性論という二つの論点は、この図式によってかなり直観的に示すことができているのではないか、と思う。そして、まさしくこれら二つの論点が、スピノザの Philosophy of Mind を考察するにあたり極めて重要になるのである。



## Summary

### The Reexamination of Spinoza's Philosophy of Mind (1)

MATUDA Katunori

Today some scholars seem to have a tendency to see in Spinoza a precursor of Mind-Body Identity Theory or Double Aspect Theory, but the author stresses that one could interpret Spinoza's Philosophy of Mind the most consistently only if one approached it with the sufficient understanding of the quite peculiar terminology and logic of his metaphysical thought.

In this paper the author tries to make clear those elements of Spinoza's metaphysics which could be decisively relevant to the exact and consistent interpretation of his Philosophy of Mind: first, the peculiarity of his concept of God as the unique Substance; second, the asymmetry between Thought and the other Divine Attributes; and third, the Principle of Intelligibility implied by his concept of Infinite Intellect.